2021.3.16山陰中央新報

北高揺らぐ名門ブランド

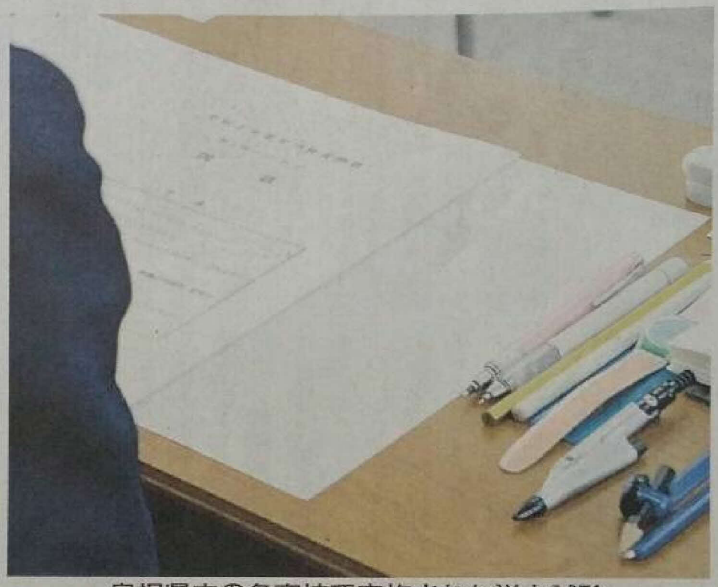
松江普通科3高校 学区廃止の先 〈上〉

生徒の意識変化あらわ

松江市内の島根県立普通科3高校（松江北、松江南、松江東）の通学区が廃止されて初めての学力試験が終わった。進路選択の自由度が増し、初年度の競争率は県内屈指の進学実績を持つ松江北の普通科が低調で、学科を新設した松江南への関心度の高さがうかがえた。松江北を中心とする受験動向や、中学教育との連携の重要性を考える。

4日午後、松江北高校（松江市奥谷町）。2021年度入試の学力試験を終え、松江城下の高台校舎から下りてきた中学3年生から、「大学進学のために頑張りたい」「親が通っていて憧れた」といった4月からの高校生活を待ち焦がれる声が聞こえてきた。

ただ、同校普通科の受験生は定員240人に対し、志願者199人で、競争率は前年度比0・20ポイント減の0・83倍とかつてない低さを記録。別の学校合格による辞退で受験者はさらに少なくなった。松江市内で60年間、維持されてきた通学区の廃止によって、約20年前に2年連続国公立大進学者数全国一になるなど島根県内屈指の伝統と実績のブランドを持つ北高に対する意識の変化があぶり出された。



島根県内の各高校で実施された学力試験＝3月4日、松江市内

他校で部活と両立

市内中学校での三者面談。北高を目指す生徒の保護者は不安を覚えた。「北高を目指すのに『勉強を頑張れ』と言われるわけでなく、淡々と受け止められた」からだ。

「（北高が）高い壁でなくなっているのか」。この保護者から相談を受けた学習塾「学び舎・くえびこ」（松江市外中原町）経営の堀本理記さん（32）は危惧した。

県教育委員会は、高校入試合格者の最低点など得点の分布がどうだったかを一切明らかにしていない。

堀本さんによると、競争率が落ちると幅広い成績の層が合格し、教員側は学力が高い層に合わせた指導ができにくくなり、結果的に授業進度が遅くなる悪循環になるという。北高には県内全体を引っ張る存在として競争力を高めてほしいと期待を込める。

別の学習塾の担当者は、北高内の学力差が受験の敬遠につながったと指摘。「勉強に付いて行けずに苦しくなるなら、他校で部活動との両立を図りたい」と思う生徒が以前より増えたと実感する。大学全入時代を迎え、進学校でしっかり勉強したいとの意識が薄れたとも考えられる。

ピンチをチャンスに

北高側は競争率の低下を真摯に受け止め、育成、募集に今まで以上に注力する考えだ。常松徹校長は「ピンチをチャンスに変えたい」と強調する。

受験者数が減った分、1クラス当たりの生徒が30人程度に減るため、これまで以上にきめ細やかな指導で学びの質を高め、生徒を育てたいとの思いだ。

目指す将来像の明確化にも取り組む。一例が医師の輩出で、学校としての地域貢献の範囲は、お膝元の松江市橋北地域でなく島根県全体と捉え、医学部志望者の進路実現の可能性を高める教育を進める。

目標に掲げる「世界の人たれ」に向けては、英語を使いこなすグローバル人材育成を明示。厳しく勉強をする意味を伝えていく。

伝統、実績ゆえに、マイナスイメージを持つ保護者も少なくない。「希望する私立でなく国公立大学を受けさせられる」「推薦入試を受けさせてもらえない」といった印象を拭い去り、保護者に取り組みをしっかりと理解してもらう機会を増やす考えだ。

記録的な低競争率が北高のカンフル剤となるか、注目される。

新報 2021.3.17山陰中央新報

生き残りへ特色磨く

松江普通科3高校 学区廃止の先 〈中〉

積極的改革 背景に危機感

新型コロナウイルスのワクチンについて考える授業に、松江南高校（松江市八雲台1丁目）理数科1年生は胸を躍らせていた。

生徒33人はワクチン製造法に理解を深めた後、この日は製造する主要3社にどんな特徴があるか、英文資料を読み、データを分析、発表。後日、生命倫理について深掘りする内容だ。

生物、英語、国語といった多角的な視点で時事問題を探究し、生徒は「大学や海外での話し合い、研究の発表などにも生かせる」と学習意欲を高めていた。

探究科学科を開設

松江北、松江南、松江東の松江市内普通科3高校の通学区が廃止され、各校が磨きを掛けるのは特色化だ。北高は世界で活躍する人材育成や特徴的な理数教育、東高は島根大や地元企業と連携した実践的な課題解決を掲げる。

関心を集めたのが、理数科を文理融合型に発展させた探究科学科を開設し、教科学習の上に探究学習を充実させた南高。2021年度一般入試の競争率は探究科学科（募集64人）が1・06倍、普通科（同200人）が1・05倍で3校中、最も高かった。



文理融合型の授業を受ける松江南高校の生徒
―松江市八雲台1丁目、同校

積極的に改革を進める背景には、通学区廃止に合わせ何も手を打たなければ生徒が北高に集中してしまうとの危機感があった。探究科学科は、前年度まで4年連続で定員40人に届かなかった理数科の2倍となる80人の定員を設けた。結果的に推薦を含めた志願者は定員を上回った。

一方、東高の競争率は前年度比0・21ポイント減の0・95倍で、前年度の高さの反動が見受けられた。とはいえ、複数の塾関係者の分析によると、東高への注目度は高く、部活動への熱心さや地域の大学・企業と連携した点が好評という。

「3校の特色を知った上で進路を決めた」。松江第二中学校区の中学3年女子は当初、南高の探究科学科に引かれたが、通学距離や部活と勉強の両立を考え、東高を志願。こうした主体的な選択をする生徒が増えれば、通学区廃止の効果に期待が持てそうだ。

「入り口」変化期待

特色化を進めるには何が必要か。島根県立高校の在り方検討委員会の会長を務めた肥後功一島根大教職大学院教授は「各校が目指す教育、人材育成にふさわしい生徒に入ってもらうため入試で適性や個性とのマッチングをするべき」と独自の入試問題作成を提案。「入り口」での変化を期待する。

「出口」も大切になる。今年は大学入試改革の一環で、31年間続いたセンター試験に代わり、大学入学共通テストが初めて実施された。有識者によると、思考力や判断力を評価する出題を目指して資料を比較検討して答えさせる設問が増え、深く考える力より、情報処理能力を測るような傾向だったものの、難易度は上がったという。

通信教育大手のまなびよによると、島根県の受験生の共通テスト（5教科900点満点）の平均点は、全国平均より53・4点低い513・6点。2010年代のセンター試験同様、低迷する結果となった。

3校にとって大学などへの進路保証は重要なテーマ。3年後の大学入試の結果で、各校の取り組みが問われる。

中央新報 2021.3.18山陰中央新報 （第3種郵便物認可）

島根愛持つ人材育成へ

松江普通科3高校 学区廃止の先 〈下〉

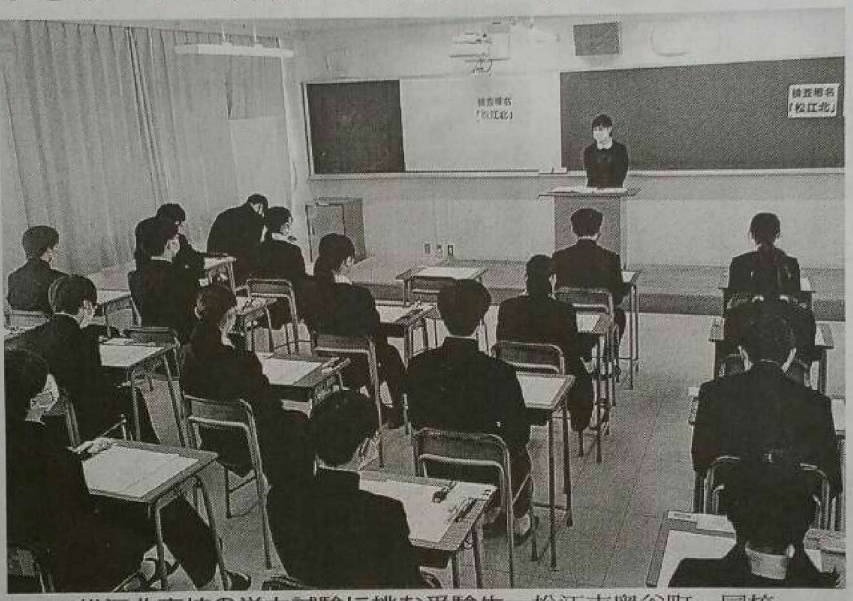
松江北、松江南、松江東の3高校が進める特色づくり効果を高めるには、中学校での基礎固めや高校へとつなぐ指導が欠かせない。高校教員は「中学のてこ入れも必要だ」と強調する。

中学3年対象の全国学力テストでみると島根県は2014～18年度、知識を問う数学A、活用力を問う数学Bともに正答率が全国平均以下。新しい形式となった19年度は数学の正答率が全国平均より2・8ポイント低い57％と低空飛行が続き、小学6年も含めた平日1時間以上家庭学習する割合は、全国46位で6割にも満たなかった。

こうした傾向は高校に進んでから響いてくる。学習内容の難易度が上がり、授業の進み方が速く、宿題が多い高校では、家庭学習が鍵になるからだ。

松江市内の学習塾が全国模試を分析すると、10年前の北高は、校内の中位層であれば全国偏差値より、少なくとも10高かったのが、今ではプラス6～8に下降。現在の南高や東高の校内中位層は、全国平均か、それを下回ることがあるという。

県教育委員会は、中学の基礎学力や家庭学習時間を課題とみて、21年度からの4カ年計画「しまねの学力育成推進プラン」に小中高校の連携強化を盛り込んだ。多々納雄二教育指導課長は、中学教員が高校の授業を見学するなど、ギャップ解消や小中高一体の取り組みで県内全体の学力向上を目指すとする。



松江北高校の学力試験に挑む受験生＝松江市奥谷町、同校

小中高一体で学力向上

受け皿の差

中学生の学びの意欲をそいでいる一因と考えられるのが、松江市内の高校の入りやすさだ。

21年度入試のデータで、松江市の中学3年生の人数1769人に対し、市内の高校の入学定員は1956人（県立6校、市立1校、私立4校）と受け皿が大きい。県内で人口規模が近い出雲市は対照的に中3生1486人、定員1411人（県立6校、私立2校）と受け皿が小さい。

県立高校の定員だけだと松江1316人、出雲1080人で、それぞれ中3生の人数に対する割合は近くなるが、松江は出雲より、私立高校が多く、市立高校もあるためだ。

県教委は、生徒数や通学圏内の学校数、年度ごとに入学の難易度を変えないという入試の公平性確保の観点で県立高校の定員を定めているという。中西正実県立学校改革推進室長は「松江と出雲で定員と生徒数の割合に差が生まれているのは承知しており、今のままでいいのかは長期的な検討課題だ」と認める。

知的好奇心

高校が特色化のテーマの一つとする探究学習を進めるには、小中学校の役割も大きい。島根大学術研究院教育学系の御園真史准教授は、教育の段階に応じて学びの質に濃淡が出れば、成長が後退する可能性があるとし「小中学校の総合的な学習の時間と高校での探究学習を有機的に結び付けるべきだ」と指摘する。

知的好奇心をかき立て、家に帰っても続きを調べたくなるような授業になれば好例だ。教員が題材の探究を深め、生徒と一緒に成長することも重要になる。

高校の在り方が変わろうとする今、ぶれてはいけないのは、島根に愛着を持つ人材育成の視点だ。いくら優秀な人材を育てても、都会地に流出して古里との関係がなくなってしまうようでは、島根の未来は明るくない。「世界で活躍しても、島根を軸にしたり、思いをはせたりする生徒を育てたい」。「世界の人たれ」を掲げる北高の常松徹校長は決意をにじませる。

（報道部・曽田元気、森みずき、片山皓平、政経部・中村成美が担当しました）